あり、此等の説によりて、一時回紇民族がネストル教徒なりしかの如く思はれたりし後、彼のドヴェリア、マルクァルト、ペイオ氏等は、其新宗教なるものゝクリスト教に非ずしてマニ教なるを説きしが、其論據とせる所は實に唐書以下の史籍に、マニ教が回紇に入りしを記せることゝ、又た其の教義を以て碑文に見ゆる二祀、三際等の文字を説き、二祀は彼の明暗の兩者を説ける二宗にして、三際は過去、現在未來の三者をいへるものなりとせるものなりしなり。此考はもとより正當のものにして彼のシュレーゲル氏が二祀を以て Zwei Sacramente、三際を以て drei Beschränkung と曲解せるは (Die Chinesische Inschrift auf dem uigrischen Denkmal in Kara-Balgassun. 1896.) 茲に明らかに説破せられたりと雖、然も碑文に記さるゝ慕闍なる名に就いては、其後新たなる史料の提供せられたるを知らず、殊に二祀、三際の語を、ペイオ氏の説けるが如く明暗の二者、過、現、未の三際と説くとするも、然も尚ほ明暗は祆教に於ても之を稱へしものにして、其當時未だ之を以て絶對的にマニ教と見る可きには非りしと共に、三際の如き語はもとよりマニ教に限りて用ふべきものに非ず、佛教にも之を用ゐ、又た近く同氏によりて發見せられたる景教經典の目錄中にも、三際經なる名を認むるに非ずや、(敦煌石室遺書景教三威蒙度讃參照) 回紇に祆教の入りし證なければ、二祀を以て祆教と見る可らざるは明らかなりといはんも、然らば多くの學者は何の憑る所ありて彼のネストル教の回紇傳播説を稱へしや、之れが證左は一も記錄の上に存するものあらざるにも係はらず、危險なる比定を基礎として碑文の慕闍の二字に所緣を求めしものに過ぎざるに非らずや、若し附會の説を敢てせしむれば、二祀三際等の文字を始め、碑文の記事は、曾て二三の學者の見たるが如く、之れを佛教とも見得ざるにあらず、また祆教とも説明し得られざるにも非りしなり、然も此の如きは既に今日に於ては説く可らず、之